

らであり、かつ、PEGは吸湿率が高いからである。

e ミョウバンで脱水処理するのも良くない。ペーハーが高く腐蝕作用をもつ。また、吸湿率が高いので、木・竹簡の表面から析出現象がおこる。

f スチレンやポリシアン、メチルアルデヒド樹脂などで脱水処理するのはよくない。これらには可逆性がないからである。

きちんと保存処理を行い、きちんと保管してこそ、研究者が処理後も木・竹簡の実物に触れることができる。その際形状、質感をそこなわないこと、重すぎないこと、一定の強度をもつこと、文字も鮮明であること。強化剤、修復材料は、材質と文字に副作用を与えないこと、また材料は可逆性をもっていることが必要である。将来より進んだ技術と材料が生まれ、それが代って利用されるであろう。

胡 継高

「中国出土木・竹簡の保存科学的研究」について

中国では考古学上の発掘調査の増加に伴って、古代の木・竹簡が大量に発見されている。しかも広大な中国では地域によって木・竹簡の出土状況も異なってくる。たとえば、砂漠地帯などの乾燥地域で発見される場合と、湿潤な地域で発見される場合とでは、出土後の保存処置もまったく違った方法をとらなければならない。この論文は、特にたいへん湿潤な状況で出土した木・竹簡の保存処理に対して具体的な例を挙げ、実際に保存処理を行っている側からの細かい注意を与えている。木・竹簡の発掘現場での取り上げの段階からすでに保存を意識している著者の意見には日本の木簡関係者も耳を傾けなければならぬ点が多い。もつとも、保存処理に臨む態度は日本の場合と変わらないが、その手法には若干の相違がみられるようである。その意味でも中国での木・竹簡の保存処理の現状を知る上で貴重な論文といえよう。

なお原文の日本語抄訳を、佐川正敏氏(奈良国立文化財研究所員)にお願いした。

(村上 隆記)